

JSPN-KSPN exchange program

In Seoul National University Children's Hospital for six weeks (2024.10.21-2024.11.30)

産業医科大学脳神経外科

長坂 昌平

Department of Neurosurgery, University of Occupational and Environmental Health

Shohei Nagasaka

この度、2024年度のJSPN-KSPN交換留学プログラムにより、Seoul National University Children's Hospital (SNUCH)で6週間の研修を行う機会をいただきましたので、ご報告します。2024年3月には、韓国において医学部定員増加に伴うデモ活動が発生し、その影響でほとんどのレジデントが病院から不在となる事態が起きました。Seoul National University Hospitalでも、1人のレジデントを除き、レジデントがいない状況でした。韓国では日本でいう助教以上の先生を「professor」と呼びます。私が訪れた際のSNUCHの教授陣は、Seung-Ki Kim先生、Ji Hoon Phi先生、Ji Yeoun Lee先生、Joo Whan Kim先生、Eun Jung Koh先生の5人で、フェローはTae Hun Kim先生の1名でした。このうちEun Jung Koh先生はHospitalistであり、手術は行いませんでした。以前はレジデント向けのカンファレンスが開催されていたそうですが、私が訪れた際にはカンファレンスは行われていませんでした。

SNUCHには手術室は12室ありますが、麻酔科もレジデントが不在ため、すべての部屋を稼働させることはできない状況でした。手術件数は以前の約70%程度に減少していましたが、それでも毎日手術が行われており、6週間で合計46件の手術を見学することができました。手術の準備及び開始は、フェローのTae Hun Kim先生とphysician assistant (PA)のRyuさんが担当し、その後、執刀医(operator)が途中から参加する形が取られていました。麻酔導入から手術の準備、ナビゲーションの設定、モニタリングのセッティングなどすべてが非常にスムーズで、

手術開始までの流れが非常に速く、当院との違いを感じました。手術内容としては、Moyamoya病をはじめ、腫瘍や二分脊椎症、水頭症など、様々な手術をみることができましたが日本の医療と大きな違いは感じませんでした。しかし、Moyamoya病の症例数は非常に多く、手術から術後管理まで確立されたプロトコルがあり、今後の手術の参考にしようと思いました。

6週間の留学期間中、手術だけでなく、ミニレクチャーや論文作成の機会をいただきました。ミニレクチャーでは、産業医について、成人Glioblastomaで使用している交流電場腫瘍治療システムについてなど韓国にない日本の医療を中心にお話をしました。また、論文作成でschwannomatosisに関するreview articleを執筆する機会をいただいたので、しっかりと仕上げたいと思います。



Fig.1 ミニレクチャーの発表前

研修5週目には、奈良県立医科大学の朴先生が訪ねてくださり、SNUCHの先生方と一緒に食事を楽しみました。翌日には、朴先生と2人で海鮮鍋や韓国チキンを堪能しました。韓国の先生方は非常に親切で、滞在期間中にはランチやディナーに度々誘っていただきました。



Fig.2 ミニレクチャー終了後の集合写真

今回が私としては初めての短期海外留学でした。「英語が上手くなってから海外留学や国際学会で発表はしたい」と思う時期もありましたが、英語はすぐには上達しません。逆にそれらを目標とすることで日常の英語の学習を頑張ることができました。留学を通じて多くのことを学べたのはもちろんで



Fig.3 SNUCH の先生、朴先生との懇親会后

すが、Joo Whan Kim 先生や Tae Hun Kim 先生など同世代の韓国の先生と親しくなる機会が得られたことは、今後の小児神経外科医としての活動において非常に意義のあることだと思います。今後の JSPN と KSPN の繋がりに貢献するのみでなく、国際医療にも貢献していきたいと思っています。

今回、このような貴重な機会をいただいたことに深く感謝申し上げます。JSPN 国際委員の理事の朴先生、委員長の室井先生、国際委員先生方をはじめ、JSPN の先生方、SNUCH をはじめとする KSPN の先生方、産業医科大学の先生方に心より御礼申し上げます。そして、5 歳、3 歳、1 歳の 3 人の子供を 1 人で世話してくれた妻にも、改めて深く感謝申し上げます。